

# 地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな「実践型教育プログラム」の開発：平成24年度報告書

|          |   |
|----------|---|
| 著者       | 土岐 篤史, 上原 美穂, 川口 智美   |
| ファイル(説明) | [奥付]<br>資料<br>おわりに<br>第6章<br>第5章<br>第4章<br>第3章<br>第2章<br>第1章<br>はじめに<br>巻頭言<br>目次<br>[表紙・標題紙] |
| URL      | <a href="http://hdl.handle.net/10232/17379">http://hdl.handle.net/10232/17379</a>             |

# はじめに

プロジェクト統括 臨床心理学研究科長 安部 恒久

JR 鹿児島中央駅の壁に、鹿児島が生んだ偉大な作家である海音寺潮五郎の「桜島わが前にあり西郷も大久保も見し火を噴く山ぞ」という言葉が刻みこまれています。この言葉は、鹿児島大学が標榜する「進取の気風」にも通ずるのではないかと思います。

臨床心理学研究科における「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発」プロジェクトは、この海音寺潮五郎の言葉のように、臨床心理学研究科教職員の大きな心意気によって推進され、最終年度を迎えることになりました。

臨床心理学研究科では、平成 22 年から 24 年の 3 ヶ年にわたり、文部科学省から特別教育研究経費の支援を得て、本プロジェクトに取り組んできました。今回は最終年度の報告となりますので、3 年間の総括を含んだものとなっており、参考資料も多く付しています。

平成 24 年度報告書では、第 1 章において事業の概要、第 2 章において南さつま市及び伊佐市での支援活動の実際を報告しています。24 年度においては、とくに伊佐市をモデル地区と位置づけ、支援活動を展開しました。この取組に対する地域からの評価は第 2 節に示されていますが、極めて好意的であり、地域としていかに必要な試みであったかということをお話しています。また、第 3 章では、昨年度において好評であったネットワークを用いた「大学と地域を双方向的につなぐ MICT の活用」を再度、「就学支援のための事例検討会における活用」として実施しました。

就学支援について専門家同士がネットワークを用いて事例検討会として討議する試みは、鹿児島県のように南北が 600km にもわたる広域な県では、今後さらに教育的活用の可能性が広がるものと期待されるところです。

第 4 章は、大学院生を対象とした教育改革に向けての調査結果が報告されており、最初に地域支援に対して持っていたイメージが、実際に地域支援に携わるに伴い、どのように変容していくかが示されています。第 5 章では、地域支援活動に関する国際交流について報告しています。地域支援を狭い枠組みだけで考えるのではなく、大きく国際的視野から発想し行動しようとするものです。最後に、第 6 章において、平成 22 年度～平成 24 年度の総括を試み、日本における臨床心理学的地域支援研究の現状を明らかにし、今後に向けての課題をまとめております。

今後、全国 167 校の臨床心理士養成大学院の皆様のご意見をいただき、より洗練されたプログラムへ発展させたいと願っております。読者の皆様には、忌憚のないご意見をお寄せいただければ有難く存じます。